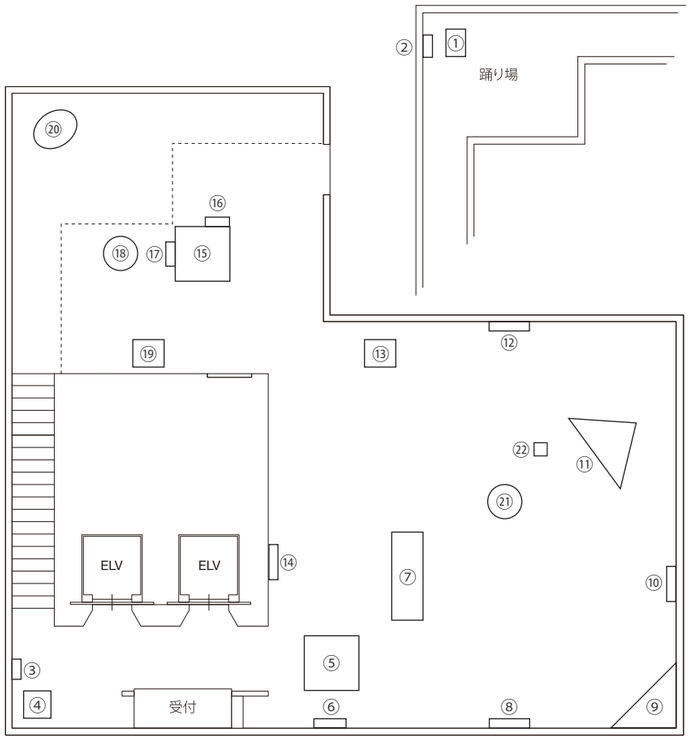
SHISEIDO GALLERY

第八次椿会 ツバキカイ8 このあたらしい世界
“ただ、いま、ここ”

会期：2023 年 10 月 31 日（火）－12 月 24 日（日）

平日：11：00－19：00　日・祝：11：00－18：00

毎週月曜休（月曜日が祝日にあたる場合も休館）



① ミヤギフトシ
《光を受けきらめく金色のペン先を、私は波のように走らせる》2023
紙、糸、インク（月夜）、万年筆、フェルト、針
*タイトルはミヤギが2021年に発表した小説『幾夜』からの一節

② Nerhol　《Lycoris radiata》2023　紙にインクジェット
*4点すべて：メンバーのスタジオを訪ね、撮影した素材をもとに制作

③ Nerhol　《Oxalis triangularis》2023　紙にインクジェット

④ 宮永愛子　《message（2019/2021/2022/2023)》2023
ナフタリン、石（陶片）、ミクストメディア

⑤⑦⑮⑱ 中村竜治　《無関係》2023　紙、ステンレス、木

⑥ Nerhol　《Aloe arborescens》2023　紙にインクジェット

⑧ ミヤギフトシ　《Banner（from Ondine) #2》2023
和紙にインクジェット、糸
*Banner (from Ondine) #1-5：五つの海（沖縄、ゴールド・フィールド、真鶴、新宮、《景体》）をピンホールカメラで撮影。刺繍は「夜のガスパール」詩三篇「オンディーヌ」より

⑨㉑ 杉戸洋　⑨と㉑《インナーディスコ2》2023
⑨《海と芋》2023　FRP樹脂、石膏、マスキングテープ、LEDライト、フルーツキャップ、ガラス、透明アクリル、ハニカムボード、木
㉑《さつま芋ランプ》2023　FRP樹脂、石膏、マスキングテープ、LEDライト、洗濯バサミ、洗濯ロープ

⑩ ミヤギフトシ　《Banner（from Ondine) #3》2023
和紙にインクジェット、糸

⑪ 目［mé］　《景体 2#2》2023　ミクストメディア

⑫ ミヤギフトシ　《Banner（from Ondine) #4》2023
和紙にインクジェット、糸

⑬ 宮永愛子　《海の頂（いただき）》2023
花椿通りの砂から作ったガラス、耐火るつぼ

⑭ ミヤギフトシ　《Banner（from Ondine) #1》2023
和紙にインクジェット、糸

⑯ Nerhol　《Amaranthus retroflexus》2023　紙にインクジェット

⑰ ミヤギフトシ　《Banner（from Ondine) #5》2023
和紙にインクジェット、糸

⑲ 宮永愛子　《詩を包む －ホワイトローズ－ 》2023
ガラス、香水（空気）、石
*石に香水をしみこませてガラスと一緒に焼成した作品

⑳ 宮永愛子　《深い眠り／あさい目覚め 》2023
花椿通りの砂から作ったガラスとレンガ、
Wrapping a Verse -White Rose-
宮永愛子作品協力：東京都水道局東部建設事務所、（株）フジケン、富山ガラス造形研究所

㉒ 目［mé］　《小さな窓》2023　写真

ROINC. 有限会社 アール　有限会社 アール：杉戸洋 芋作品制作協力

コロナ下で始まった第八次椿会。メンバーが初めてリアルに顔を合せたのは、資生堂の美術収蔵品を保管している倉庫でした。そこでは、それぞれが選んだ収蔵品を確認し、それらと新たに制作して展示する作品ついての話し合いを行いました。その後、資生堂ギャラリーに集まり、空間を分け合うように1年目の展示作業をおこないました。2年目は、オンラインで月1回の打ち合わせを重ね、アイデアを共有し合いました。展覧会では、個々の作品が緩くつながる展示スペースと、それぞれがアトリエから持ち寄った品々で構成した部屋という２つの空間ができあがりました。1年目、2年目と、メンバーはお互いの関係を深めていきながら、同時に自分自身を確かめる時間を過ごしました。

最終回となる3年目、我々は、これまで暗黙的に目指していた調和から一歩踏み出し、「放置」と「無関心」をキーワードに準備を進めてきました。その背景には、コロナによって人とのつながり方や生活様式が変化したことで、これまで誰も目を向けていなかったものに対して豊かさを感じた体験がありました。また、常識や経験から解放され自由になってみることへの挑戦や、自分のコントロールや意思が及ばないことを受け入れる諦め／潔さという意味も含んでいます。もう一方で、これまでに築いたメンバー同士の距離感や信頼を解きほぐして個に戻るという試みもありました。本展を通して、それでもなお感じとれるつながりや、コロナ下で気づいた日常に潜む豊かな景色について、今一度考える機会となりましたら幸いです。

第八次椿会メンバー　プロフィール

杉戸洋（すぎと ひろし）
1970年愛知県生まれ。92年、愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業。小さな家や、空、舟などのシンプルなモチーフを好んで描き、繊細かつリズミカルに配置された色やかたちが特徴。武蔵野美術大学美術館で2021年開催の「オムニスカルプチャーズ－彫刻となる場所」では、会場構成を担当。平成29年度（第68回）芸術選奨、文部科学大臣賞受賞。

中村竜治（なかむら りゅうじ）
建築家。1972年長野県生まれ。東京藝術大学大学院修了後、青木淳建築計画事務所（現AS）を経て、2004年中村竜治建築設計事務所を設立。主な作品に、「へちま」ヒューストン美術館、サンフランシスコ近代美術館収蔵（2010、2012年）、「JINS京都寺町通」（2016年）、「神戸市役所1号館1階市民ロビー」（2017年）、「MA nature」（2021年）など。第6回京都建築賞優秀賞（2018年）、第32回JIA新人賞(2020年)など受賞。

Nerhol（ネルホル）
田中義久と飯田竜太の二人からなるアーティストデュオ。連続撮影をした数百枚のプリントを束ね、彫り込むことで生まれる立体作品を発表後、ポートレイト、街路樹、動物、水、あるいはネット空間にアップされた記録映像等、様々なモチーフを選びながら、それらが孕む時間軸さえ歪ませるような作品を制作。そこでは一貫して、私たちの日常生活で見落とされがちな有機物が持つ多層的な存在態を解き明かすことを試みている。2020年VOCA賞受賞。

ミヤギフトシ（みやぎ ふとし）
1981年、沖縄県生まれ。2005年、ニューヨーク市立大学卒業。2012年にスタートしたプロジェクト「AmericanBoyfriend」では、沖縄で沖縄人男性とアメリカ人男性が恋に落ちることの関係性等をテーマに、作品制作やトークイベントの開催などを行なっている。自身のアイデンティティや出身地の沖縄、アメリカ文化など題材とした映像や写真作品だけでなく、小説も発表。

宮永愛子（みやなが あいこ）
1974年生まれ。京都府京都市出身。第3回シセイドウアートエッグ出身。京都造形芸術大学美術学部彫刻コース卒業。東京藝術大学大学院美術学部先端芸術表現専攻修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。2019年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

目［mé］（め）
目［mé］は、日本の現代アートチーム。不確かな現実世界を、私たちの実感に引き寄せようとする作品を展開。手法やジャンルにはこだわらず、展示空間や観客を含めた状況、導線を重視。創作方法は現在の中心メンバー（アーティスト荒神明香、ディレクター南川憲二、インストーラー増井宏文）の個々の特徴を活かしたチーム・クリエイションに取り組み、発想、判断、実現における連携の精度や、精神的な創作意識の共有を高める関係を模索しながら活動している。さいたま国際芸術祭2023ディレクター。

X（旧Twitter）　Instagram　第八次椿会特設ページ